議　事　録

（令和６年度　第１回井原市総合教育会議）

日　時　令和７年２月１３日（木）
　　１４時００分～１５時３０分
場　所　市役所５階 503･504会議室

出席者　井　原　市　　大舌　勲市長
　　井原市教育委員会　伊藤祐二郎教育長、藤井秀彦教育長職務代理
　　奥田隆夫教育委員、服部教弘教育委員、西田友美教育委員

【事　務　局】　総合政策部　安東総合政策部長
　　総務部　藤原総務部長
　　総務課　片井総務部次長、安部課長補佐
　　教育委員会教育総務課　西村教育次長、岡崎課長補佐
　　〃　　学校教育課　米本課長
　　〃　　生涯学習課　小倉課長補佐

１　開会

＜総務部次長＞

それではご案内のお時間が参りましたので、ただいまから令和６年度第１回井原市総合教育会議を開会いたします。

私は、本日進行務めさせていただきます総務課長の片井と申します。

どうぞよろしくお願いします。

開会にあたりまして、大舌市長からご挨拶を申し上げます。

２　市長あいさつ

＜市長＞

皆さんこんにちは。

ここ２週間ほど、週末になると大変大雪が降ったり、冷え込んだりする天候が続いておりますが、今日はそういった温かいなという気がいたしております三寒四温と言いますけど

も、これから冷え込んだり温かくなったりするのが繰り返されて春になっていくわけでありますが、今日も今話があって担当課長も感染症でお休みということであります。
感染症まだまだ流行っておりますので、しっかり気をつけながら活動をしていきたいというところであります。

今日は令和６年度の第１回の井原市総合教育会議ということでご案内いたしまして、ご出席賜りましてありがとうございます。

この総合教育会議は、教育委員会と行政側、執行部、市の一般行政が一緒になってこの井原の行政のあり方、教育のあり方をともに協議しましょうという場でありますが、まさに今、行政としても進めております「ひとづくり」はまさに教育の教えて育てる、まさに教育の一環でもありますし、「まちづくり」の一環でもあるということで、教育と一般の行政とはもう切っても切り離せないのが、この「ひとづくり」ではなかろうかと思っております。

教えて育てるといいますけど教えるというのは、基本的には知識のある人が経験のある人が、ない人に授け教えてということだろうと思いますが、それが全てではなくてそれをきっかけにということなんでしょうから、教育である部分と、自ら学ぶ部分とが併用して動いていくのが「ひとづくり」であったり、本当に成長なんだろうと思っております。そういった中で、こういった総合教育会議では様々なご意見をいただきましてありがとうございます。

本日は井原市で作ろうとしております第５次子ども読書活動推進計画について、それぞれの立場でご意見をいただけたらと思って開催をいたしておりますので、忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げまして開会の挨拶といたします。
どうぞよろしくお願いいたします。

３　議　事

＜総務部次長＞

（配布資料確認）

ありがとうございました。

議事に入ります前に、資料の確認をさせていただきます。

まず、本日の会議次第、それから１枚もので、右上に小さく概要版と示されているもの、続きましてＡ４の縦向きでございますが、ホッチキス留めで第５次井原市子ども読書活動推進計画、それからA４タテホッチキス留めで左の上にアンケート結果と記されている３枚ものの資料、以上が本日の資料となります。不足等はございませんでしょうか。それでは議事に入らせていただきます。

進行につきましては、井原市総合教育会議運営要綱第２３条の規定に基づきまして、大舌市長にお願いしたいと思います。

(1) 子どもの読書活動について

＜市長＞

はい、それでは早速次第に従って議事を進めたいと思います。

まず、（１）子どもの読書活動について、生涯学習課から説明をお願いします。

＜生涯学習課課長補佐＞

はい、失礼いたします。

それでは着座にて説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは子ども読書活動についてのご説明をいたします。

お手元の資料のうち、アンケート結果の方をお出しください。はじめに、子ども読書活動の状況についてアンケート結果の推移を元にしながらご説明いたします。このアンケートは、今年度、子ども読書推進計画策定の際に行ったもので、そのアンケートの対象は子どもと子どもの保護者を対象に実施いたしました。

今回の子ども読書活動に係るアンケートの結果と、前回５年前に実施いたしましたアンケート結果の二つを比較し、子どもの読書活動が５年間でどのように変化しているかを見える化したものとなっております。

アンケートの実施対象者は前回と同じ分け方をしておりまして、子どもの減少によるアンケート対象者数の若干の違いはございますが、対象者ごとに子どもやその保護者の思いを活動の状況が読み取れるようになっています。アンケートの区分につきましては、１ページ上段の方にお示ししておりますように、市内小学校低学年、高学年合計で５４７人の配布としております。幼稚園と保育園児の保護者、小学生の保護者、中学生の保護者合計で、７４４人へ配布いたしました。それぞれ、学校・施設を通じて、令和６年７月にアンケートをお願いしました。回収できた人数や、回収率もその横に記載をしています。

それでは、アンケート資料を抜粋しながら、子どもの読書活動状況について、ご説明をさせていただきます。

はじめに、小学校低学年をご覧ください。一つ目の、「本を読むことが好きですか？」の質問では８０．８％の子どもが「好き」と回答しており、前回結果から微増となっております。「嫌い」と答えた児童は減少をしていますが、「どちらでもない」へ移行しているような状況であります。

また、電子媒体による本の読み方が増加傾向となりました。

「１か月に図書館へ行く回数」では、「０回」、つまり１か月に１回も行かない児童が増加し、「読書イベントへの参加」の質問でも、「ない」がわずかに増えております。

「家庭での読み聞かせ」の質問では、「してもらっていない」児童がわずかに増加傾向となっています。

低学年の読書活動は、本から、保護者のスマホやタブレットなどの電子媒体を利用したものが増えている状況が読み取れ、読書イベントなどへの参加や、図書館利用など、家庭外での活動が、この５年間で消極的になってきている状況が読み取れる結果となっております。

続きまして小学校高学年をご覧ください。

「本を読むことが好きですか？」の質問では「好き」と回答した児童が、前回から１０．５％減少しており、その半分半分で、「嫌い」と「どちらでもない」に移行しています。

低学年と同じく、電子媒体による本の読み方が増加しているという傾向にあります。「図書館へ行く回数」では、やはり「０回」が増加しておりまして、「イベントの参加」では、「ない」が増加の傾向にあります。高学年になることで、図書館に行く回数や、読書イベントへの参加しない子どもが増えてきている傾向が、さらに強く出ています。

高学年の読書活動についても、低学年と同様に、電子媒体を利用したものが増えてきている状況が読み取れます。イベント参加、図書館利用など、家庭外での活動が、この５年間で消極的になってきている状況が読み取れると思います。

続いて、中学生をご覧ください。

同じく「本を読むことが好きですか？」の質問では５０．２％の子どもが「好き」と回答しております。前回結果からは７．９％減しております。「嫌い」と答えた子どもも２．６％減少しており、その分、「好きでも嫌いでも、どちらでもない」というところが増加をしているという状況です。

小学生中学生同じ様に、電子媒体による本の読み方が増えております。「図書館に行く回数」の「０回」の子どもや、「読書イベントへの参加」の質問についても「参加したことがない」が増加をしております。

中学生の読書活動につきましても、同じく電子媒体を利用したものが増えている傾向にございます。、図書館利用、イベントなどへの参加が、消極的になってきている形でございます。

なお、中学生の質問では、「図書館の場所」を知っていますか、「本の購入場所」に関するのアンケートをしております。

「図書館の場所を知っていますか」という質問で、「知らない」との回答がわずかに増えております。「本の購入方法」についての質問では、「本屋で買う」が全体の９０％以上を占めておりまして、５年前と比べても増加しております。本を購入する際は、市内の本屋は減少していますが、そういった中でも、やはり本屋で手に取ってから、本を購入している形が見えております。

４ページここからは、保護者へのアンケート結果となっております。

はじめに、幼稚園、保育園児の保護者の思いや、読書活動の状況でございます。

「読書や読み聞かせを大切だと思いますか？」の質問では、「子どもの興味に任せている」と答えた保護者が３．８％減った替わりに、「とても大切」と回答した保護者がプラス２．１％あります。「他のことを大切にしたい」と考えている保護者も１．７％の増加、「子どもの興味に主体的に任せている保護者」は、５年前から減少をしましたが、その全ての保護者が読書活動へ向いたわけではなく、「他のことを大切にしたい」と考える保護者も増えている状況でございます。

「家庭で読み聞かせ状況」では「していない」が、わずかに増えております。「読書イベントへの参加」は「ない」が増加傾向であります。「１週間の読み聞かせの回数」では、「１回」の保護者が５．５％増えております。幼児期の保護者の読書活動としては、どちらかと言えば消極的になっているのではないかと思われます。

ただ、「１年間の図書館利用回数」の質問では、「０回」の保護者が７．２％減り、「１から６回」の保護者が８．７％増えていることから、図書館に行く回数は増加しており、図書館へは、お越しをいただいていることが、５年前と比べると見えてきます。

「電子書籍の利用」の状況は、子どもと同様に増加をしているという形です。

続いて小学生の保護者でございます。

「子どもの読書の必要性」の質問では、「とても大切だと思う」が３．６％減っております。「子どもが関心を持てば大切にしたい」が３．０％増えております。「子どもの主体性に任せる傾向へ」、移行してきている結果が読み取れるかと思います。

また、「家庭で読み聞かせ状況」では「読み聞かせをしている」のがわずかに増えております。保護者の中では、読み聞かせの意識がわずかではありますが広がっているのかな、という形でございます。

保護者本人のことを聞いた質問で、「書籍を全く読まない」が増加しております。「家庭で子どもと一緒に読書をしているか」という質問では「していない」が増加しております。

「図書館へ行った回数」では「０回」が増えております。保護者本人の読書活動は、５年前と比べ、減少傾向になっていることが、読み取れます。

いずれも「電子書籍の利用」は増えております。

それから中学生の保護者についてでございます。これが６ページです。

「子どもの読書の必要性について」では、小学生の保護者と同様の傾向となっており、子どもの主体性に任せる傾向へ、移行してきている結果が読み取れております。

保護者本人のことを聞いた質問で、「書籍を全く読まない」が９．２％と増加しております。「図書館へ行った回数」では「０回」が大きく増加をしておりまして、保護者本人の読書活動は、５年前と比べ、減少をしていることでございます。

「中学生の読書についての思い」では、「読書より勉強に力を入れてほしい」と「読書の時間がとれないのは仕方ない」の合計で５年前は１６．１％でしたが、５年後の今回では８．６％と変化しておりまして、保護者が他の考えに移行し、その半数の３．９％が「良い本にしっかり親しんでほしい」へ移行しておりますが、残りの半分は「ゲームやテレビの時間を減らして読書にあててほしい」の回答へ移行していました。中学生になると、「ゲームやテレビ」を読書活動以外の時間で楽しんでいる、とアンケート結果で読み取れます。

「電子書籍の利用」につきましては、幼児の保護者、小学生の保護者と同じように増加をしています。

以上、アンケート結果をもとにしながら、現在の子どもの読書活動の現状と、子どもの読書活動を支えている子どもの保護者の思いと読書活動の状況を、５年前と比較をしながらご説明をさせていただきました。

全体的な総括といたしましては、子ども自身の読書活動は、小学生も中学生も図書館に行くことや、読書イベントに参加するなどの活動が５年前に比べて減少しております。

パソコン、スマホ、タブレットなどの電子媒体によるお手軽な本の読み方が増加をしている。

子どもの保護者の読書活動も子どもと同様な状況がみられている。そして、保護者自身も子どもに対して与えてるような状況があったそういうタブレットなどを与えているような状況が増加傾向になっています。

ただ、幼稚園児と保育園児の保護者につきましては、図書館に行くことが０回の人が減少しておりますので、幼児の保護者は積極的に図書館で本などを借りて読書活動を行っていきたいと思っているという傾向があるのかと思います。子どもの読書活動は電子媒体を利用している場合が増加傾向となっておりますが、やはり紙媒体の本による読書習慣の形成と読書

への関心を高める取り組みを読書活動関係者が連携して進め、生涯学習課では、未来を担うひとづくりの一つとして、子ども読書推進協議会の評議員と一緒にこの取り組みを進めて引き続きいきたいと思っております。

＜市長＞

今のこのアンケート結果の説明がありましたが、これを見られて質問ないでしょうか。

感想などありましたらどうぞご発言ください。

＜藤井代理＞

読書関係のイベントって具体的にはどういったものですか。美星の場合は読書フェスティバルっていうのをやってますけど、他に市内では。読み聞かせとか。

＜生涯学習課課長補佐＞

そうですね。読み聞かせとか。

＜市長＞

同じことを聞きたかったんですけれども、小学低学年用、高学年用、中学生に対応したイベントとはなんですか。中学生が行くイベントがあるの。

＜生涯学習課課長補佐＞

生涯学習課の方はどちらかというと、幼児とか小学生の読み聞かせをお願いしていたり、そういったものが多いですけれども、図書館ではどうですか。

＜図書館長＞

図書館でも中学生を対象にしたイベントはないです。美星公民館がされている読書フェスティバルは、美星中学校の生徒さんがビブリオバトルとか言って本の紹介をするイベントがあります。

＜藤井代理＞

参加したことがあるという人は、美星中学校の生徒さんだけかもしれませんね。

＜図書館長＞

あと、図書館ビンゴとかスタンプラリーとか、図書館にきたらスタンプを押す、３つ集めたら景品がもらえるとか、ビンゴになったらとか、大体小学生までですね。

＜藤井代理＞

そんなことを考えたら、幼稚園とか小学校の低学年ぐらいまでは、全体的にも読み聞かせとかそういう機会があっても、高学年になったら機会がない。その辺のところをもっと魅力的なイベントなんか作るのか、それとも調査項目から落とすのか。

＜市長＞

よろしいでしょうか。

＜奥田委員＞
　感想っていうことも含めて、やっぱり親の保護者のやっぱり読書に対する意欲というか姿勢というか態度というのが、やはり子どもに対する影響もこれは大きいなということを感じましたね。やっぱり図書館に行く回数でも、何回行きましたかっていう項目なんかでは幼稚園や保育園の保護者では、０回は減ってきてるわけなんだけど、小学校中学校では、そのあたりですね、増えてきているということで、親が読書を大事に思うというか、意識が高くなると、やっぱり子どもたちもそれにつれて、変わってくるんだなということだから、親に対するPRが読書に対する意欲かっていうかそういったことも必要だなということを感じましたね。はい、以上です。
＜市長＞
　やっぱり低学年、小さい頃に習慣にしてないと、急には行けないですね。
＜藤井代理＞
　中学生の保護者も図書館に行ったり、本を全く読まない人も段々増えていってるんですけど、図書館に来る０回、子どもに対しては、本に親しんで読んで欲しいというのが増えていくと矛盾してますね。
＜市長＞
　おそらく本を読むことが図書館に限らない、電子媒体もありますけども、本屋に直接買いに行かれる人も多いのかなと思い、要は読みたい本をどこで手に入れますかいう質問がないんですけども、図書館の比率が高いのかやっぱり自分で本屋で購入するのかによって、図書館の利用率はぐっと変わってくるのかなという気がしますので、これから図書館の運営する中ではですね、図書館の役割なり機能なり、今の子どもたち、幼児が多いというのはやっぱり絵本とか子どもの頃はやっぱり購入していくより、いろんなものを見せたいというのが、これおそらく購入すると大変なことになるんで、図書館であるものを手当たり次第に見させてあげたいそういう機能はすごくあるんだろうと思うけど、自分がしっかり読みたい本は、今の生活習慣も含めて、返却期間じゃなくて自由に、読みたい人がおれば購入でしょうし、そのあたりのニーズがちょっと図書館としての子どもの読み聞かせではなくて、図書館としてのニーズがちょっともう少し研究するといいのかなっていう気はしましたね。
それでは続いてどうぞ。
＜生涯学習課課長補佐＞
　それでは、「第５次井原市子ども読書活動推進計画」の（素案）と書いてございますものをお開きいただきたいと思います。２ページをご覧ください。

子どもの読書活動における推進の経緯などを、抜粋しながらご説明申し上げます。

本市の、子どもの読書活動につきましては、平成１３年１２月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行され、この法律により、「すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができるよう、環境の整備が推進されなければならない」との基本理念が示され、平成１７年３月に「井原市子ども読書活動推進計画～いばらいきいき読書プラン～」（第１次計画）を策定して、以降、５年ごとに、社会状況の変化に応じた、子ども読書推進計画の見直しを図りながら、子どもの読書活動を推進するための様々な活動に対して、関係者が連携して取り組んでまいりました。

今後も、子どもの読書活動を取り巻く環境は、メディア化が進むことも予想されますが、先ほどのアンケート結果にもありますとおり、子どもの「活字離れ」「読書離れ」に歯止めをかけるためにも、子どもの読書活動を一層推進しようとする機運の高まりも見られることから、この５年間の「成果」「課題」を整理し、今後５年間の子どもの読書活動の推進の基本的方針と具体的な方策を、取りまとめているものでございます。

本市では、「未来を担うひとづくり推進事業」の一つとして、この読書活動推進を掲げており、今回の「子どもの読書活動推進計画」の策定につきましても、子どもの読書活動推進を、市と連携して取り組んでいただいている「井原子ども読書推進実行委員会」の方に担っていただき、この５年間の成果と課題を整理し、引き続き、読書習慣の形成に向けた取り組みの推進や、読書への関心を高める取り組みの充実に重点を置いて、その具体的な方策を、まとめていただいたものとなっております。

３ページ「読書活動の意義」の２段目にありますとおり、子どもの読書活動は、「家庭」、「学校」、「市立図書館」、「地域」という、子どもの読書活動を推進する主体、四つの推進主体が、協力し合いながら組織的・計画的な読書の環境整備を進めることが重要としています。

４ページをご覧ください、

本市の目指す子ども像といたしましては、これまでの経緯・背景・意義を踏まえて、前回と同じ、「自ら本を読む子ども」、「読書を通じ自分の生活をより豊かにできる子ども」、の、育成を目指すこととしております。

その下は、発達段階別に「目標」を示しており、乳幼児期は、子どもが絵本に初めて出会い、読み聞かせてもらったり、自ら手にとって見たり読んだりして、読書活動に親しむ時期であり、「目標」は、絵本との出会いや読み聞かせなどを通じて、本や読書活動が好きな子どもを育てること、でございます。

５ページ、小学生期は、子どもが読書習慣を身につける入門期として、前期では、いろいろな本の読み聞かせを繰り返すなど読書活動を通じて語られた言葉をイメージ豊かに読み進め、自らのものにしていくことで、読書週間の素地が作られるとし、後期では、多様な本に出合い、自らの興味・関心や目的に応じた主体的な読書活動の基盤となることとしております。

「目標」は、日常的な家族読書（家族が一緒に本を読んだり、）を支える取り組みやイベント、学習と関連づけた読書活動の設定と、読み聞かせから読書への移行を支援するとともに、子どもの読書意欲の向上や読書週間の基礎づくりを図ることとしています。

中学生以降では、子どもが、個々の興味、関心や目的に応じた主体的な読書ができるようになる時期であり、その一方で、読書に対する意欲が二分化する傾向が顕著になり始める時期でもあります。幅広い読書や専門的な読書及びそれらに関連した読書活動を行うことは、子どもの人としての生き方を考えたりする一助となり、心豊かな人生を送るための礎を形成する時期として、「目標」は、単に学習のための読書という枠を超え、自らの興味・関心や目的に応じた幅広く専門的な読書や読書活動ができるように支援することとしています。

６ページをご覧ください、

「不読率」の現状と目標でございます。不読率につきましては、「１か月間に１冊も本を読まなかった人の割合を示すもの」で、この数値も、前回計画と同じ「０％」を目標値といたしております。

表をご覧ください、直近の、国・県の調査数値と、今回の市の「アンケート結果による数値（令和６年）」は、小学生では、国が６．４％、県が８．９％、市は７．１％。中学生では、国が１８．６％、県が２５．７％、市は１１．９％となっている状況で、市のアンケート数値は、県の数値をいずれも下回っております。小学生の不読率が、前回よりも下回っているため、子どもの読書活動の、より一層の推進を図っていくことを必要と考え、すべての子どもが本に親しむことができるようにと、不読率の目標値は前回と同じ０％としております。

計画の期間につきましては、５年ごとに見直しとなっております。

続いて７ページをご覧ください、ここからは、取り組みの主な成果と課題について、四つの推進事業主体ごとにまとめております。

まず、「家庭における子どもの読書活動推進」です。

成果といたしましては、ブックサービス事業、これは、４か月検診の時に、図書館職員とボランティアで出向いて行って、幼児期の読み聞かせの大切さの説明と絵本２冊と絵本

リストの贈呈、セカンドブックサービス事業、これは２歳児検診の時に、ブックスタート事業後のフォローアップと読み聞かせの実施、その場での図書館への登録サービス事業の定着により、子育てにおける読み聞かせや読書活動の重要性の理解は進んでいるとしております。

また、絵本ガイドや図書館だよりの作成、配布、市広報の活用により、読書活動や読書イベント、推薦図書など、家庭への情報発信はできているとしております。

課題といたしましては、読書活動の重要性はよく理解されているものの、生活スタイルや価値観の変化や多様性により、思いが実生活に生かしきれていない傾向があるのかなと思っております。

読み聞かせや読書を子どもの意思に任せている保護者が多く、積極的な働きかけが弱いのかなという感じは見受けられます。

続きまして、「学校園における子どもの読書活動推進」です。

幼稚園保育園の取り組みの成果といたしましては、季節に合わせた絵本や読み聞かせを定期的に実施、園の絵本を貸し出しすることで、家庭内でも絵本を楽しむことができているとしております。

課題といたしましては、多くの保護者が保育園・幼稚園で本を借りているので図書の購入や、補修・更新などをいたしたいと考えております。

１０ページ、続いて小学校・中学校の取り組みの成果といたしましては、各校とも、図書担当者を中心として、学校司書と連携しながら、年間計画の立案や図書だよりの作成などで、学校の読書活動を推進しており、読書活動の場が提供できるようにしております。

また、図書館団体貸し出しや、移動図書館さくら号を利用するなど、市立図書館との連携ができているとしています。

課題といたしましては、魅力ある学校図書館づくりのための読書環境整備は、継続して工夫・努力していくこととしています。

また、家庭での親子読書などの推奨、図書だよりの発行や研修会、保護者・家庭への啓発など、工夫して取り組むことが期待されることとしております。

１２ページ、「市立図書館における子どもの読書活動推進」の成果といたしましては、子どもにとって魅力ある図書や学習に必要な図書を務めて収集して、情報の提供ができるようにしております。特別コーナーの設置により、読書への関心と意欲の喚起ができているとしています。

また、井原市ホームページや図書館ホームページなど、子どもが参加できるイベントなどの情報発信も行っております。

課題といたしましては、子どもにとって魅力ある図書や、学習資料として必要な図書の収集を引き続き行うこととし、情報提供・情報発信にも努めることとしています。市内３館・移動図書館車「さくら号」の図書の充実を図り、読書離れが進んでいる年齢の子どもへの興味・関心が高められるよう、家庭・学校・地域と連携して手だてを講じる必要があるとしています。

１６ページ、「地域における子どもの読書活動推進」でございます。

公民館での取り組みの成果といたしましては、幼児教育学級、家庭教育学級の活動の場として活用され、読書活動にも充てられ、美星公民館では読書イベントの会場としても利用されています。

課題といたしましては、公民館に設置している本が古いものも多いので、充実が望まれることとし、市立図書館の団体貸し出しを積極的に利用していただいて、充実を図っていただいたら良いのではないかなと思っております。

井原保健センターの取組といたしましては、成果として、ブックスタート・セカンドブック事業の実施場所として連携もとれ、本に親しむ機会の提供ができていると思います。

課題といたしましては、図書カードの作成の呼びかけとしています。

１７ページ、読書ボランティア、読み聞かせボランティアの取組の成果といたしましては、各学校園、放課後児童クラブ、市立図書館などで、読み聞かせの活動を積極的に行っております。

課題といたしましては、読み聞かせボランティアの維持、拡充に向け、新規ボランティアの啓発を積極的に行っていく必要があるとしています。

続きまして、四つの推進主体ごとの「役割」と「主な方策」についてのご説明をいたします。１８ページからです。

まず、「家庭」の役割をご覧ください。

家庭の役割は、保護者が意識的に身近に本がある環境をつくり、子どもと一緒に読書を楽しむ機会を持つなどして、子どもが本と出会うきっかけをつくること、そして、その後も発達段階に合わせて、子ども達の読書活動に対する興味・関心を引き出していく働きかけが求められるとしています。

主な取り組みは、保護者が積極的に読書を行うことで、読書が身近にある環境づくりを務めること、同じ絵本や本を親子で読むなど家読、家庭での読書という意味ですが、読書活動を通じて親子の時間を共有するように努めること、ノーメディアの取り組みなど生活リズムを整え読書の時間を確保するようにすることとしております。

１９ページの「学校園」をご覧ください。

学校園の役割は、園児・児童・生徒の読書習慣の確立のため、保育活動や教育活動の全般にわたり、中核的な活動の一つとして、読書活動を位置づけ、発達段階に応じた指導を、家庭や地域と連携して推進することとしており、幼稚園・保育園は、乳幼児期は、子どもが生まれて初めて絵本に出会う大切な時期とし、小学校期は、読み聞かせや絵本の段階から文字中心の読書へのステップアップの時期を経て、興味・関心や目的に応じた主体的に応じた読書への移行時期とし、中学生期は、目的に応じた主体的な読書、豊かな読書体験や自己のものの見方や考え方の確立につながる幅広い読書を通じて、読書習慣が深く定着してくる時期として、３つの時期に分けて考えています。

主な学校園の取り組みは、全体としては、子どもが気軽に図書に出会えるような魅力のある学校図書館や図書スペースの環境整備、読書ボランティア、図書館司書等との連携を強め、読書関連行事等の活動を一層工夫して展開するなどとしており、個別の取り組みとしては、幼稚園・保育園は、読み聞かせや紙芝居、ストーリーテリングなどの読書活動を引き続き行うことなどとしております。小学校・中学校は、家族読書やノーメディアの取り組み等を実施することで、児童・生徒が読書活動に親しむ機会を増やすように努めること、朝読書をはじめとする一斉読書の時間を継続して実施することなどとしております。

２２ページ、市立図書館の役割といたしましては、気軽に図書館を利用できる雰囲気づくりに努め、家庭や学校、地域において日常的に読書に触れることができるように支援する必要がある。子どもたちの「知りたい、読みたい」という要望に素早く応え、いつでも図書館を利用できる環境づくりを促進するとともに、職員による来館者へのサービス向上や市内３館及び市外図書館との連携が大切としています。

取り組みとしては、発達段階に応じた体系的な読書指導や環境の整備、学校司書と協力して、読書の時間の確保や読書関連行事を工夫して、本好きな子どもを育てることなどとしております。

次に、「市立図書館」の枠をご覧ください。

市立図書館の役割は、気軽に図書館を利用できる雰囲気づくりといつでも図書に出会える環境づくりを行い、主な取り組みは、市内３館・移動図書館車「さくら号」の図書の充実を引き続き行っていくこととしております。先ほども申し上げましたが、ブックスタート事業・セカンドブック事業を継続して実施し、本の好きな子を育て、保護者への啓発も行うこととしております。

最後に、「地域」の役割というところをご覧ください。

地域の役割は、家庭・学校・市立図書館・子育てに係る団体等が行う、読書活動の支援であり、読書活動の会場の提供や、ニーズに応じた講演やイベントの開催など、としており、主な取り組みは、公民館は幼児教育学級や家庭教育学級活動支援と地域の読書スペースとしての環境づくり、健康医療課はブックスタート・セカンド事業への協力、つどいの広場では読み聞かせやお話し会の実施、児童会館はイベント活動に合わせて、読書活動に関する内容を取り入れたり、放課後児童クラブでは読み聞かせ等の読書活動の機会の場を増やしたり、図書館団体貸し出しの利用による読書環境の整備したり、読書ボランティアは学校園、放課後児童クラブなどの読書活動の支援を行うこととしております。２５ページは、図書館における団体貸し出しの利用団体数の内容を掲載しております。

最後に、第４章として、子どもの読書活動の推進体制と広報啓発について記載しております。

この計画案は、このたびのアンケート結果をもとに、今後の５年間を見据えて策定したもので、「井原子どもの読書推進実行委員会」は、子どもの読書活動の一層の推進に向け、各推進主体が組織的な連携を図るための体制づくりを行っていくとともに、総合的に支援・推進していくことが求められているとしています。

子どもの読書活動推進体制の整備では、井原市の子どもの読書活動推進の拠点を、引き続き「井原子どもの読書推進実行委員会」とし、井原市教育委員会のひとづくり事業として生涯学習課が事務局として、各推進主体の取り組みを支援する。

各推進主体の連携強化では、井原子どもの読書活動推進実行委員会が中心となり、引き続き、井原市教育委員会のひとづくり事業として生涯学習課が事務局の中で、組織的な取り組みとなるように連携強化を図ることとしてまいります。

読書活動の啓発では、井原子どもの読書活動推進実行委員会は、各推進主体の取り組みが、組織的かつ全市的なものになるよう、総合的に支援・推進に努めて、広報活動も行うというように考えております。

以上が概略の説明となります。

＜市長＞

説明がありましたが、皆さんのご意見、ご質問、自由な発言をいただければと思います。

＜藤井代理＞

図書の貸し出しとか１人当たりの１か月の貸し出し数かな、ありましたよね。

これは１４ページにある各図書館とさくら号だけのもので、各学校図書室の貸し出し関係とかは考慮に入ってないでしょうか。

＜生涯学習課課長補佐＞

入っていません。

＜藤井代理＞

６ページの不読率についても、学校の図書室で借りている本は対象には入っていない。

＜生涯学習課課長補佐＞

これは入っています。

＜藤井代理＞

わかりました。それでも小学校は不読率が上がっている。

＜奥田委員＞

今の関係で、６ページの不読率の方は元年と比べて、２．６から７．１となっているあたりは、生涯学習課としては原因をどのように捉えられているのでしょうか。

＜生涯学習課課長補佐＞

実際のところ、井原市だけを見ると、岡山県も国の方も若干そういった傾向にあるのかなと思うんですけれど、先ほど言ったように子ども自身の主体性に任せているという保護者が増えてきているので、積極的に本を与える、本がある環境に置かせるということが少なくなってきているのかなという風には思っております。興味があれば読ませる、というような考え方が大きく影響しているのかなという風には思います。

＜奥田委員＞

そうすると親の、保護者の影響が、先ほどあったように子どもに影響を与えるということになってしまうと。なかなかゼロに持っていくには非常に厳しい現状にあるということだね。

＜藤井代理＞

小さいころ読み聞かせとか一緒にするし、そういった企画も図書館もしますから、幼稚園とかもありますから。小学校高学年となれば学校と子どもたちと保護者、それが連携をとって、読書しっかりしましょうね、というんですけどなかなかそれが浸透しないということなんでしょうね。そういうイベントもないし。

＜生涯学習課課長補佐＞

年齢が上がると興味も多様化しますし、それは仕方がないし悪いことでもないのかもしれないですけれど。

＜藤井代理＞

読書だけというわけにもいかないかもしれないね。

＜西田委員＞

私は幼稚園や小学校で読み聞かせをしているんですけど、私が感じていることなんですが、幼稚園や小学校低学年くらいまでは本当に本が好きで、読書を家庭でもいい本を持って読書の機会が多いと思うんですけど、小学校高学年くらいから中学生くらいになったときに、子どもたちの会話からよく聞こえてくるのはゲームで遊んでいるとか、帰ったらゲーム、今ネットでつながるので時間の使い方が読書には向きにくい状況なのかなと思いますし、課題なのが先ほど奥田先生がおっしゃったように保護者の意識、保護者も子どもが小さいときにはいい絵本をと思っていても、さっきおっしゃたように主体性に任せて、子どもの気が向くのなら読めばいいやくらいになると子どもたちの時間の使い方が楽しい方に流れていくので、なかなか読書を勧めたくても勧められない現状なのかなと思います。

＜市長＞

アンケートで出ているんですけど、不読率、これ地区別、地区別というか学校別がでるんですか。

アンケートの内容はわかりませんけど、小さい学校は学校からイベントとして本を持ち帰って読みましょうとすれば、ほぼ100%不読率はないのかなあと思うんですけれど、例えば大きい学校でそういう活動をやってもみんなが持って帰らなかったりすると、小学校の不読率が上がってるという原因は家庭ですか、イベントですかっていうのはこの中じゃ出てこない、見当たらないのかなと思いますし、中学生の９割近い人が本を読んでいる、そんな時間があるんだな、部活したりする中で部活の参考書として、テキストとして読むのか。本が何かわかりませんけど、逆に僕らから言うと結構読んでるなという気がしてますが、そのあたり不読率を落とそうとすると、実態が見えないと、なかなか家庭が頑張りましょう、学校もやりましょうって、そのあたりがしっかりアンケートから拾えれば、本当に読ませたいところに届くのかなあと思います。

＜服部委員＞

よろしいですか。

＜市長＞

どうぞ。

＜服部委員＞

ブックスタートの事業が結構大きい役割を担っているのかなと思っています。

うちの家庭のことを思っても、言われたように小さい頃は結構絵本を読んだりイベントにも参加をして、私たちの子どもの頃を思っても、小学生くらいは結構読んでるなという印象を受けています。

言われるように色々な興味も出てきたりするんで、それはそれで、活字を追うと言いますか、文章を読むということ自体がまあ意味があるかなと。本を読むということなんですけれど、ハードルが上がると思うんです。私らの中学生時代のことを思っても。先般の全国の学力、学習状況調査のアンケートでも、新聞を読んだり新聞を読む習慣のある子の方が、読解力が高かったり論理的思考が高かったりする結果がたしか出ていたと思うんですけど、私は個人的にも毎朝新聞を開くのが一つの楽しみであって、ニュースとか事件とかだけではなく、社説やコラム、それから投稿欄や色々なところで人の文章を読むということが楽しくなってくるんですけれども、そういうことを読書がしにくくなってくる高学年や中学生くらいから、さらには大人に対して文字を読むといいますか、人の描いた文章を読むことによって、読んだ自分自身がどういう感想を抱くとか自分がどういう風に思ったかとかいうのと、自分自身と向き合うみたいなのが本を読むといいますか文章を読むことがなにか教育かなと思いまして。先般の井原文学賞の授賞式とかあるかと思うんですけど、友人や他人の書いた文章に触れることも非常に意義があるかなと思っています。

ですから推進主体が４つある中の学校園とか地域のイベントも多いし、右側２つは井原市は充実しているかなと思ったりして、左側の家庭と図書館、図書館行ったら面白いんだということを子どもに周知できるような方策がとれれば、読書にみんなが積極的に親しんでいけるかなと思ったりしています。以上です。

＜奥田委員＞

先ほどの不読率に戻るんですけれど、２１ページにありますね、小学校中学校、学校関係の取り組みということで、下から４つ目の朝読書をはじめとする一斉読書の時間を継続して実施します、ということを謳っているんですが、段々傾向としてですが、学校の朝の時間ですね、学習関係でドリルの学習をする時間に充てる場合が最近は多くなっているんじゃないかなと、実態を僕は知らないんだけど。以前は結構朝読書ということで大体１０分間すると思うんですけれど、１０分間はみんな読書しますということで子どもたちは自分の好きな本を持ってきて、机の中に入れているんですね。時間が来ればさっと出して１０分間読むよということで校内シーンとして他人と一緒に読むという環境を作っておったわけですね。だけどそれはゼロになりますよね。学校全体でやるわけですから。方針としてね。そういう形は、前はあったかなと思うんだけれども、段々学

力の方に重点が移りますので、算数のドリルをやりたいんだと、うちはそこが弱いんだとかあったりして、そこを重点的にやられて、変わってきている面もあるかなあということはね、現実期には増えてきたというのも、そういった朝読を実施している割合も減ってきたなあということもあるのかなという思いはするんですが。

＜教育長＞

奥田委員さんが言われたのは実際にいくらかあるんではないかなと思います。これを見たときに、中学生の不読率はあまり変わっていない。中学校は、朝読をまだ一週間のうち、かなりの日数をやっているんではないかという風に思います。

ところが小学校では、朝読と朝学習の割合が、今、奥田委員さんが言われたように、朝の時間を使ってのドリル学習みたいな部分が以前より増えてきているのかなと。そういったところは、感じる部分はあります。

おそらくそれだけやってて、例えば中学生一割くらいの子は不読率が出てくるんですけど、やっぱり中学生くらいが選ぶ本というのは結構量がありますから、おそらく朝読だけでは、ある意味読み切れない。じゃあそれ例外の時間はというと、読んでいないということも言えるのかなと。

＜藤井代理＞

１４ページの年代別の年間利用者数を見ても、小学生の７から１２と、それから高校生の１６から１８、これが３０歳代と比較すると大分落ち込みが激しいかなと。中学生についてはまあ、ほぼほぼ横ばい。子どもの数が減っているんですから、どっちかというと増えている。割合から言ったらね。高校生についても、市内の高校生の数が、学校に通う数が減るということは、利用者からいったら減るのはこれは仕方ないかな。小学生の利用者人数が４千人近く減っている。いくら人口的に見ても子どもの数が減っているにしても、ちょっとこれ落ち込みが大きいのかなという気がするんですけどね。このあたり、図書館に行ってもらえるような工夫というか、必要かなという気がするんですけど。

＜西田委員＞

小学生は、図書館に行こうと思ったら親御さんに連れて行ってもらわないと行けないのかなって、小学生の保護者のアンケート結果を見ても、親御さん自身も図書館に行かない感じですからこういう結果につながっているかなと思うんですけれども。

＜奥田委員＞

保護者の影響が大きいね。

＜市長＞

この表、できたら母数がわかるんですから、何回も使っている人もいるんでしょうけれども、母数がわかったら割合が出てくるんで、何人、何件でしょうけれども、これ件ですよね。ということは、一人何回もあるかもわかりませんが、母数があれば何割というのが、割合が増えているのか、人数が増えているのか減っているのか、まあ実数はこれでしょうけれど。というのが見えた方が分析としては、傾向を見るんだったら、その分析がいいですね。利用者数が減っていますとかいうのを見るんだったらこれでしょうけど。割合の方がわかりやすい。

これは素案が出てますけど、今後どこでどんな風になるんでしょうか。今日この場でそれぞれ意見をもらっていますけど。

＜生涯学習課長補佐＞

この場でこういったように変えた方が良いというのがあれば、いただいて変更をかける。それから、実際に委員さんに見ていただくという形になっていきますので、もしも今言われたように分母がわかる方がいいと付け加えた方がいいであるとか、実際に反映するということになれば、変更は可能ということなので。

＜市長＞

この会がこれを作る会ではないので。

＜生涯学習課長補佐＞

ご意見をいただいてということになります。

＜市長＞

プラン作成の委員会としては最終どうなって。

＜生涯学習課長補佐＞

最終的には、こういう意見をいただいたということで、変更かかるかかからないか最終そこなんですけれども、かからなければ印刷ということになります。

＜市長＞

皆さんなにかございましたら。

＜服部委員＞

図書館に限らず、生涯学習の施設とか活動事業そのものがそうですけど、小学生中学生高校生と、子どもが中心のサービスの提供が多いと思うんですけど、そもそも生涯学習とか社会教育というのが労働者が携わるのであって、より豊かな生活ですとか幸せを獲得するとかが本来の目的だったと思うんですけど、そういう意味で言えばこの図書館にしても、事業所に対して積極的に図書館を利用していただけるような方策があれば、より利用

者も増えるし、市民の皆さんの豊かな生活に結び付くかなと。図書館に限らず、色々な生涯学習の施設や事業について、ちょっと思っています。
＜市長＞
　図書館長。要は事業所もたくさんあるし、せっかく無料で本を貸し出しできるので、それぞれ事業所に図書館の情報を出すというという風にならないかな。
＜図書館長＞
　団体貸し出しという制度がありまして、事業所も登録できますので、そういったことを利用して、事業所に本を置いていただくということもできますし。地域の課題支援ということで、リクエストをいただければコーナーを作ったりすることも考えるのも良いのではと思っています。
＜市長＞
　図書館としても積極的にニーズを聞きに行かないと。行くことによって、必要な情報を図書館に取り寄せるということも必要では。
＜藤井代理＞
　今の関係で言ったら、５０代以上の利用者数が増えてるっていう分析はされているんです。４千人近く増えているのかな。結構大きいですね。
＜図書館長＞
　５０歳以上と言いながら、６５歳以上、高齢者の方がだんだん増えているのではないかとおもいます。
＜教育長＞
　実数でなくて割合でださないから。母数がどのくらいかこの資料としてあった方が比較はしやすい。
＜市長＞
　図書館が綺麗になったら利用者は増えると思いますよ。間違いなく。
　ですけど今、必要な人が来て見ていただいているということは、サービスは提供しないと。高梁のように民間のカフェと一緒になると相当なお金を出しておりますので。一冊当たり単価が１０倍くらいなるんじゃないですか。
＜藤井代理＞
　この前初めて知りましたけど、年中無休なんですね。
＜市長＞
　年間何億と出してますから。運営費をですよ。
＜西田委員＞

先週視察研修で瀬戸内市に行ったんですけど、その時に高校の入学生に対して、オリエンテーションで、図書館の使い方というか、利用の説明をする機会を設けていらっしゃるとおっしゃってたんですけど。駅に近いこともあって、高校生が帰りに寄ったりとか、学習スペースが充実しているので学習に来たりとかおっしゃっていたんですが、井原市で自分も感じることがあるんですが、幼小中と市立図書館というのが、学校図書館というのは学校にあるので本を借りれると思うんですが、親として市立図書館というのがもうちょっとつなぐ工夫とか、小学校と中学校と市立図書館をつなぐようなきっかけがあったら、親御さんも子どもと一緒に図書館に行ってみようかなと思えるんじゃないかな。今はそれが感じないというか、思いました。

＜市長＞

ご指摘ですので、館長頑張りましょう。

＜図書館長＞

小学校になったら３校４校ぐらいは２年生になったら図書館見学ということで、図書館に来られて、書庫なんかを見て、一冊ずつ借りて帰られるというようなことはしています。

＜西田委員＞

私も図書館に行ったときに小学生が見学に来ているのを見たことがありますけど、青野とか、なかなかそういうのは難しいので、どうしても親御さんに連れて行ってもらわないといくことができない。子どもたちも行きたい、親たちも行くよと思えるつながりづくりがもう少し出来たら違うのかなと思いました。

＜図書館長＞

また検討させていただきます。

＜奥田委員＞

館長さん、今、小学校で図書館を見学しに来ている学校というのはどれくらいあるんですかね。

＜図書館長＞

井原図書館では、木之子小学校、井原小学校、稲倉小学校が令和５年度は来られました。

＜奥田委員＞

今年は。

＜図書館長＞

今年は資料を持ってきていないので。

＜奥田委員＞
　３校か４校くらいなんですかね。
＜図書館長＞
　芳井と美星はそれぞれ地元の小学校が。
＜奥田委員＞
　以前と比べると減ってきているじゃないですか。そうでもないですか。
＜図書館長＞
　コロナがあったから。
＜奥田委員＞
　コロナの前なんかは。
＜図書館長＞
　ちょっと調べてないです。
＜奥田委員＞
　昔のことを言っちゃいけないんだけど、社会科の授業で図書館は教材としても、図書館に行って色々見せてもらって、すごくそこでもカードなんかも全員作ってしまって、借りれる体制をばっちりとってしまうというような形でかなり意欲というか、ああいいねというような感覚を持ってたと思うんですけど。今はなかなか難しいということなんですね。
＜教育長＞
　小学生の図書カードは今どんな感じ。
＜図書館長＞
　小学生の図書カードは、井原小学校は除くんですけど他の小学校はさくら号が行きますので新入生の中で持っていない方は学校へ申込書を配っていますので、大体全員に作ってもらってます。
＜奥田委員＞
　全員作っていますね。小学生はさくら号であれば、今の話で行ったときに作っていない人は作りますよと言えば、借りれる、準備OKというわけですよね。それだったらうまいこと意欲と結びつけば、距離がグッと近づいて本を読みたいなとかさくら号借りたいなとかの形でね、広がっていくような、そんなことを思うんですけどね。そんなやり方で一つＰＲをどんどんしていけば、子どもたちも面白いんだなというような機会が得られるんじゃないかなと思うんですけどね。
＜市長＞
　他に何かご意見ございますでしょうか。

よろしいですかね。お気づきの点があれば直接生涯学習課へご意見をお届けいただければと思っております。

それでは、（２）その他ですが、まず事務局から何かありますか。

＜総務部次長＞

ございません。

＜市長＞

皆さんから何かございましたら。

よろしいでしょうか。

それでは議事を終了とさせていただきます。

事務局にお返しいたします。

４　報告

＜総務部次長＞

ありがとうございました。

それでは次第の４番、報告にまいります。

「就学前教育・保育施設のあり方検討委員会の状況について」に関しまして、学校教育課の方から報告をお願いします。

＜学校教育課長＞

それでは着座にて失礼します。

それでは、就学前教育・保育施設のあり方検討委員会の状況についてご報告いたします。

第1回の検討委員会を１２月３日（火）に開催いたしました。委員は全員で１１人で、会の中で委員長と副委員長を決定していただきました。その結果、委員長には岡山大学の吉川准教授、副委員長には元西江原幼児園長の青江様にお願いすることになりました。

その後、伊藤教育長が諮問を行いました。

その諮問につきましては、近年の社会の変化に伴い、保育園の利用を希望する家庭が増加する一方、幼稚園の就園児数は激減しており、集団による効果的な教育保育を行うことが困難となっている園が多数あること。また、幼稚園の利用を希望する家庭が今後も減少していくことが見込まれる状況を鑑みた上でのものであります。

諮問事項といたしましては、少子化や保育ニーズに対応した「井原市立就学前教育・保育施設の適正規模、適正配置及び形態について」であります。

続いて、今後のスケジュールと資料を事務局から説明した後、保護者へのアンケートの素案をお渡しし、第１回は終了いたしました。

第２回の検討委員会は１２月２４日（火）に開催いたしました。会の中では、保護者アンケートに関するご意見をいただきました。いただいたご意見で主だったものといたしましては、本調査の背景や目的をもっと具体的にわかりやすくし、冒頭に明記する方がよい、専門用語はわかりやすい言葉に変えた方がよい、制度についてもわかりやすく説明する必要がある、家庭の意向を分けて深堀するようなシートを作ればよいのではないか、幼稚園と保育園のことが混在してわかりにくいので、わかりやすく分けた方がよい、質問によるが、回答の選択肢が多すぎるなどでありました。

最後に保護者アンケートのスケジュールと、検討委員会の次回の予定をお伝えして第２回の検討委員会を終了いたしました。

その後、第２回の検討委員会でいただいた意見を反映させた保護者アンケートを委員長と副委員長に確認していただき、了承を得ることができましたので、現在、業者を通して対象の保護者へ送付しているところでございます。

今後の予定といたしましては、委託業者が年度内に集計及び分析を済ませることとなっておりますので、それを受け第３回以降の検討委員会で答申の作成に向けて協議を進めていただくこととしております。

答申をいただいた後につきましては、令和７年度内に市教育委員会の方向性を決定し、令和９年度からの新体制でのスタートに向け、準備をしてまいりたいと考えております。

報告については以上です。

＜総務部次長＞

この件につきまして、何かご意見等ありましたら。

ないようですので、次第の５番に移らせていただきます。

閉会にあたりまして、伊藤教育長からごあいさつをお願いいたします。

＜教育長＞

失礼します。今日説明をさせていただきました「第５次井原市子ども読書活動推進計画」を策定中であります。本日はこの素案を基にして総合教育会議において、色々なご意見を出して協議することができました。協議の中にも出てまいりましたが、近年インターネットというメディアの普及、これが子ども読書が減ってきているということにつながってきているとうようなご意見をいただきました。

学校教育、社会教育それから社会教育、それぞれの場で子どもたちに対して読書が推進できるような取り組みをしていくということは、今後も必要だろうということを思っております。

また、中でも保護者の意識と言いますか、そういう面が非常に大切なので、保護者への啓発というようなこと、井原市はブックスタート、セカンドブックをやっているんだけど、それが今度はその年代その年代で続いていくような啓発が引き続き必要だろうというようなご意見もいただきました。

本日の協議を具体的な取り組みにつなげていき、子どもたちの読書がさらに推進できますことを祈念いたしまして、閉会のあいさつといたします。

本日はありがとうございました。